

山下祐介編

『砂子瀬・川原平の生活文化記録集 第三号』

砂子瀬・川原平を歩いた人びと

菅江真澄・平尾魯仙・津軽民俗の会』

村中 健大

本書は山下祐介氏の、西目屋村砂子瀬・川原平における調査・研究成果の一つとして刊行されたものである。まず最初に編者の活躍について整理してみよう。

岩木川上流の津軽ダムの建設に伴い、建設地である西目屋村砂子瀬・川原平の住民が移転されることになった。このため消滅してしまう両集落の歴史と文化を記録するため、平成九年度に西目屋地域生活文化調査委員会が発足する。これに、当時弘前大学人文学部社会学研究室の教員であった田中重好氏と編者が加わることになる。両教員と、その指導を受けた学生は、平成十年から十三年度にかけて共同調査を実施し、当時の住民にライフヒストリー（生活史）調査を行った。その後も編者と一部の学生が調査を継続し、その成果は学生らの卒業論文と、編者の「砂子瀬・川原平の歩み―人々の暮らしからたどる地域の歴史¹⁾」に結実する。この論考は、昭和初頭から平成の津軽ダム建設による移転までの、同地域の生活の諸側面に光を当てて論じたものである。

また編者は、砂川学習館の事業においても中心的な役割を果たしている。同館は砂子瀬・川原平の生活文化を学ぶための資料展示と教育普及

活動を行う施設で、平成十四年五月に開館している。館ではこれまでに企画展「写真で見る砂子瀬物語」「尾太鉦山を学ぶ」「平尾魯仙の暗門山水観図、白神山地の昆虫展」「目屋のマタギ展」などを実施し、成果の一部を『砂子瀬・川原平の生活文化記録集』シリーズにまとめている。本書は同シリーズの第三号として刊行されたものである。

以上を踏まえた上で、本書の内容について見ていこう。本書は次のⅠからⅤの五項目から成り立っている。

Ⅰ 佐藤仁「白神への道、白神からの流れ―目屋地域の歴史的考察」平成十六年に佐藤氏が行った講演の再現である。中世以来の目屋（弘前市東目屋および西目屋村）の歴史を述べているが、特に中近世の政治動向と街道の変遷について金石文などをもとに詳しく論じている。

Ⅱ 菅江真澄の足跡

江戸時代の旅行家菅江真澄の紀行文「津可呂の奥」「雪の母呂太奇」「都介路迺遠地」「外浜奇勝」のうち、目屋部分の記録を掲載する。本文は既刊の文献から転載し、現代語訳は刊本をもとに編者が行っている。また森山泰太郎が真澄について述べた既発表の論考も掲載している。

Ⅲ 平尾魯仙と目屋溪

江戸時代末の国学者・画家の平尾魯仙が目屋の風景を写生した作品「暗門山水観」（山形岳泉写）全五二図をカラー版で掲載している。また魯仙による説話・奇談集「谷の響」「合浦奇談」から、目屋に関する項目を抜粋している。魯仙と「暗門山水観」についての解説は、ほぼすべて森山泰太郎の講演録・講演資料・原稿・既発表の論考に依っている。

IV 津軽民俗の会 砂子瀬民俗共同調査（昭和二十六年～二十七年）

津軽民俗の会が昭和二十六年から二十七年に実施した砂子瀬民俗共同調査の全容とその成果について、資料をもとに詳細に解説している。同会および同調査は、戦後の津軽における民俗研究の嚆矢と位置付けられるが、それを正面から本格的にとりあげたのは本書が初めてであろう。

掲載資料は、同調査の事務資料、調査を報道した新聞記事、調査成果（地図、会誌、スライド作品、スケッチ、松木明や森山泰太郎の論考）などである。これらの資料は、同調査の総務を担当した森山が残したものが主となっている。また、柳田國男が書き込みをした森山の『砂子瀬の話』（昭和二十八年）が一部写真で掲載されている。森山と柳田との交流を知る上で注目すべき資料である。

V 写真で見える『砂子瀬物語』

先に挙げた津軽民俗の会の調査時に撮影され、森山泰太郎が所蔵していた砂子瀬の写真数百点を掲載している。一部は森山の『砂子瀬物語』（津軽書房、昭和四十三年）などに使われているが、ほとんどは未発表のものと思われる。解説は『砂子瀬物語』に報告された事例の抜粋が中心となっている。

編者の狙いは何であろうか。編者は森山の『砂子瀬物語』や真澄の紀行文などをもとに目屋地域を実際に歩き、地元の人に聞き書きを行ってテキストの内容と対照する作業をしている。これは、昭和の初め頃までの砂子瀬周辺地域を「もともとも古い生活形態を残した山村」と仮定した上で、そこに長い間伝えられてきた〈記憶〉を、その後のダム建設に伴

う二度の移転などといった大きな変容とともに理解し、現代につなげようとしていると理解できる。また、平成の現代において編者や学生らが実施した聞き書き調査の成果（前出「砂子瀬・川原平の歩み」など）を、より大きな「歴史」の中に位置付けんとしていると捉えることもできる。そのための基礎作業の一つとして本書の刊行があったのだろう。

本書の特色を見よう。一つには、図版や写真を可能な限り掲載し、読者に視覚的な理解を持つてもらおうとしている点が挙げられる。これは上述したとおり、砂川学習館で行われた企画展の成果を反映していることによるものであろう。真澄や魯仙のテキストの多くは既刊の本からの転載であるが、図版に関しては改めて写真を求めたらしく、大きなカラー版となって見やすくなっている。また津軽民俗の会によるスケッチや写真は、ほとんどが未発表のものである。学術的に価値が高いことはいうまでもないが、眺めて楽しめる構成になっているのは大きな魅力である。

ただし掲載資料とその筆者・作者についての解説が、津軽民俗の会を除いてほとんどないという難点がある。いくら資料集といえども、いや資料集だからこそ、編者が読者にそれらをどのように読んでほしいのかを説かないのは不十分だろう。真澄・魯仙については編者の代わりに森山泰太郎による解説・論者が載せられているが、「森山にとって真澄・魯仙は何であったか」について編者自身が解説していないため、それもまた位置付けが分かりにくくなっている。

評者が一番注目し、また不満に思っている点もここに係る。本書で注目されるのが、森山泰太郎が遺した資料や原稿を整理し、発表した点で

ある。改めて述べるまでもないが、森山は民俗学の泰斗であり、その功績なくして今日の青森県の民俗研究はなかったといつて過言ではない。

評者もその著書を読み、民俗学の道に導かれた一人である。だが森山は残念ながら平成十五年三月にこの世を去られており、後学の我々はその業績をどのように評価し、受けつぐのかといった大きな問題に直面していたところであった。そこでまず期待されていることは、森山のテキストを個々の関心に引き寄せて利用することではない。何を「資料」としてまなざしたのか、どのような方法を実践してきたのかといったことを精緻に読み解き、同時代的な意味付けを探ることである。編者のご遺族の協力の下に森山の書齋整理の成果を発表したことは評価できるし、本書の価値も決して低いものではない。しかしもっと森山に向き合い、その仕事をきちんと紹介することが求められていたのではないだろうか。せつかくの貴重な資料が十分に生かされていないように感じるのは、評者だけであろうか。

以上、勝手な感想を述べてきた。評者の不見識から来る読みの浅さや誤読・誤解があったことと思うが、どうかご容赦いただきたい。編者には、浅学の身でありながら書評の任を引き受けた非礼をお詫びするとともに、今後のさらなるご活躍を祈念申し上げます。

註

- (1) 西目屋地域生活文化調査委員会編『津軽ダム西目屋地域生活文化調査報告書 砂子瀬・川原平の記憶』(国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所、平成十七年)。

(2) 成田敏「青森県」民俗誌にみる民俗研究の流れ(倉石忠彦ほか編『日本民俗誌集成』第二巻、三一書房、平成九年)。

(3) これについては森山泰太郎「先生と私」(『季刊悠久』第三八号、桜楓社、平成元年。後に森山『北のフォークロア』(北方新社、平成三年)に再掲)、「柳田国男 指導者の横顔」(『日本民俗学』第二二二号、日本民俗学会、平成十四年)も参照されたい。

(4) 前出「砂子瀬・川原平の歩み」のほかに、山下祐介「古道の記憶 目をめぐる菅江真澄と森山泰太郎」(『津軽学』三号、津軽に学ぶ会、平成十九年)など。

(5) 山下祐介「山村集落の変容と流域社会」(『社会学年報』第三四号、東北社会学会、平成十七年)、前掲註(4)「古道の記憶」。

(6) また『青森県の民俗』第三号(青森県民俗の会、平成十五年)の森山追悼特集に寄せられた文章からは、テキストに表されない森山の研究姿勢を知ることができる。

(A4判、三三八頁、砂川学習館、二〇〇七年三月刊)
(むらなか・たけひろ 十和田市役所職員)